

でしたが、女おんなはそれでもはなさずに泣なきわめいて居ゐたんです、どうも夢ゆめとは言いひながら、あまり見みつともよいものではありませぬ、そこへかかみらしい女おんなが出てきましたつけ、それから何なにんでも雙方ちうほうをなだめて、中なかなほりをしたやうに見みへました、そして聞きもなく若わか旦那だんなが歸かへられたのですヨ、若わか旦那だんな、是これからの夢ゆめは、尙なほ更さらら肝かん心じんですよ、ハイ、そうして居ゐますとネ、別べつの間まから出でて來きた若わかい男おとこがあるのです、どうも見みたことのある面つらだと、よく氣きをつけて見みたら、訥とつ升せうのやうなんです、若わかエツ、訥とつ升せうと我われ知しらずと語ごをはさんだ、小僧こぞうは委い細さいかまはず、小「ハア、どうしても訥とつ升せうなんです、訥とつ升せうは女おんなに向むかひ、すこ

い腕うでになつたナーと云いふやうな見み得えでした、すると女おんなは、訥とつ升せうと云いふ、千兩せんりやう役やく者しやの仕し込こみだから、少ちしは違ちがいますよとすまして居ゐましたよ、若わかエツ、本ほん當とうか、小こ若わか旦那だんな、何なにをおわはてなさるんです、是これは私わたしの見みた夢ゆめでございませよ、若わかい、どうも夢ゆめとは思おもはれんナ、して其その先さきはどうした、小こイヤ、此このさきは胸むねくそがわるくなりませすから、言いひませすまい、若わかイヤ、たのむよ、どうか言いつてくれ、小こ「それでは申ましますよ、不し忍にん池ち畔はんの馬ば場ばのやうな所ところでござりましたが、そこにポロ／＼した形かたちで、手てか足あしに病びやう氣きがあつて、あゆむことも出で來きぬやうな若わかいものが、ボンヤリ立たつて手てのうちを乞こふて居ゐるのです、ハテナと、よく

變な夢を見た



見たら若旦那のやうなんです、そこで私はさう思ひました、これお逆夢だ、うその夢だ、若旦那のやうな身分のある人が、袖乞をするわけではない、だから逆夢だと思ひました、すると若旦那は、恐ろしいものだナと、深く感じられたやうであつたが、これからの後は、讀書専門の若旦那となられた、

○火事は何處だ

忠助、忠助は居らんか、忠こゝに居りますと、家根の上で返辭する、主人「さうか、モウあがつて見て居るのか、火事は何處らと見へる、忠どうも分りませんで、圭方角は

何處へらに見へる、忠方角も判然いたしません、芝でございませしやうか、其れとも麻布でございませしやうか、圭「遠いか近いか、忠それもどうもはつきりしませんので、遠いやうな近いやうな、圭それでは何が分かる、忠ハイ、火事があると云ふこと丈は、正に判然と分ります、圭馬鹿め、

○滿洲とまんちゆりあ

淺どんく、英國とエギリスとは違ふのか、淺ひとつよ、小なぜ英國と云つたり、「エギリス」と云つたりするんだ、淺それは滿洲と云つたり、まんちゆりあと云つたりする

火事は何處だ 滿洲とまんちゆりあ



と同じことサ、

僧小くばんわ

○小僧と演戲

由どん、莚升も左團次となつたら、滅法界器量をあげた、由、どうしてサ、松太郎忠彌の堀端つたらなかつたぜ、石を斯投り込んでの見得わネ、飛び立つ程だつたヨ、由「松さん何時見て來たエ、松ウム、イヤ見たのではないよ、さいたんサ、

○日比谷公園

日比谷公園をぐるぐるめぐつて、道と云ふ道を歩みつ

すには、幾時間かゝると思ふネ、吉さん、吉分らねへや、やつて見ぬへからネ、竹急ぐと三時間ばかりであるけれど、四時間以上かゝる、吉どうして知つたエ、竹昨日遅かつたらふ、禿め餘り酷なことを云ふら、故意と遊んできたのよ、吉今度おれもやつてやらふ、竹ウム、やんねへ〜、と言ひながら、極小聲になり、吉どんは直ぐ本當にするからかもしれいと獨語して居た、

○五間ばかりの大蛇

酒屋の小僧八百屋の小僧に向ひ、おい、左吉さん、今動

立逆の臍お

日比谷公園 五間ばかりの大蛇



僧小くばんわ

物園前でネ、六尺ばかりの青大將が居たよ、左、フム、ど  
うしたへ、六太郎何んでも取つつかまつたやうだ、左よし、  
往つて見やうと、どんくくかけて往つて見れば、三尺た  
らずの小蛇が死んで居る、左へ、、、、、、六め、  
しツかりかつぎあがつた、一つかついでやらふと、ブラ  
く歸つてくると、水菓子屋の小僧與三郎にあつた、左  
「與三公く、早く動物園の前へ往て見る、二間ばかりの  
大蛇が死んで居るぜ、與さうか、それお見物だと、エツ  
サツサとかけたして、往つて見て何んのことつた、笑は  
せあがらわと、ブラく戻つてくる道で、米屋の福松に  
あつた、與福さんく、動物園の前へ早く往けよ、五間

ばかりの大蛇がネ、動物園からのたくり出てよ、イヤ  
ハヤ大さはぎだ、福さうしてどうした、與何んでもぶつ  
つめられたやうだ、福さうかとこれも亦、エツサツサと  
かけ出して、往つて見ておどろいた、是れは小僧共ばか  
りではないが、甚だよろしからざることだ、自分がたま  
されて悔しいとして、外の人までたますとは、はなはだ忌  
むべきことである、

○下女と小僧

友どん、家の下女ぐらい意地の曲てる奴も少ないネ、友  
「せうぞ、面のまづいのもあの位な奴は少ないよ、睡をし

立逆の廣お



ていやな身振りしあがるネ、友「それより閉口することは  
 ネ、お飯のお菜だ、こゝろみに奴をおこらして見たまへ、  
 敵面だぜ、藤道理で先頃もかたきうちされた、藏へ往か  
 ふとするとき、あの大きな尻で道をふさいでるだらふ、  
 だから戲言半分にネ、お福どん、お尻をどつちかへ片附  
 てくんねへと言ふたら子、サアおこつた、さうして生れ  
 つからくつついて居るから、仕方がないと云ふんサ、そ  
 してサ、お晝のお菜がおもしろいでねへか、おれんところ  
 へはネ、お香物は澤庵のあたさま、肴は首のところの骨  
 ばかりで身のないところサ、友「アツハ、、、、  
 どんもそれを喰つてるネ、おればかりと思つたら、藤見

ねへ芳さんのを、わの人はわの通りお世辭がよいだらふ、  
 おまけにやさしいだらふ、馬鹿は言はねへしサ、からか  
 はねへしサ、親切で丁寧ときて居るだらふ、だから何時  
 でもうらやましい位なお菜サ、友「それにサ、いやに旦那  
 に胡麻をすりてサ、いやに信用されてるからネ、我黨の  
 不利此の上なしときて居る子、藤「だから團体を組んで、  
 断然と排斥するんだネ、若しきかれずんば勇退と出かけ  
 るか、ハ、、、、お藤藤どんに友どんは、何をヒソヒ  
 ソばなしするんだよ、又わたしの蔭口か、憎らしい、藤友  
 「そらわ、お出でなすつた、逃げろく、」



○番頭と小僧

徳どん、何を茫然見て居るんです、わの方は片がつきま  
 したか、留どん、此の方をいつもの通りしておいて下さ  
 い、又どんは座睡か、本當に世話のやける連中だと、口  
 小言を言ひながら奥に入れば、三人互いに顔を見あはせ、  
 あれだから子、番頭面しあがつて、誰が畏いもんか、此  
 のうちにばかり日が照んよ、米の飯はお天當さまと一所  
 に、ついてまはつてるよ、留どんも又どんもネ、彼奴の  
 見る時ばかりおかせぎよ、何かまふもんかネ、小言を云  
 ふを番頭の役目かと思つて居あがるんだよ、又「およしよ、

きたよ〜、留エヘン〜、これは斯か、われは彼かと、  
 無暗にかせいで居る風をする、

○御新造さん

定吉や、お前御苦勞だけれど子、之れを深川のいつもの  
 家へ届けて来ておくれナ、あついに氣の毒ネ、定「へい、  
 一走りに往つて参ります、新「イエ、そんなに急んでもよ  
 いです、ゆつたりとして往つてお出で、それからネ、是  
 れは内緒であげるんだよ、歸路に眞砂座でも見ておいで  
 よ、定「へい、ありがたふございますと、おし戴いて懐に  
 入れ、退いて店に来て、あれだから子、御新造さんのこ



と、云へば、店の仕事をうつちやつても、みんなでかけまはるも無理はない、どうだへ、早く往つてきますと云へば、おそくなつてもよいと云ふし、かへりに演戯でも見ておいでと云ふんだからネ、どうしてあんなにおもいやりがあるのだらう、はやく歸つて来て、一つおどろかしてやらふと、ニコくもので出て往つた、餘程人を使へなれた人と見える、

○大旦那

松か、モウ往つて来たのか、馬鹿に早いではないか、何、私の早いのではない、外の人のおそいのだと、ウム、さ

うかも知れんよ、電車へ乗つたか、乗らぬと、なぜ乗らぬのだ、ウン、あつい所をあるいて病氣にでもなつたらどうする、少し休め、お苦勞だつたネと言はれて、松吉は心から嬉し相な顔をして、御用がかりましたらと云ふて退いた、

○女隠居

芳二郎や、お前ネ、御苦勞だけれどネ、又お寺参りの伴をしておくれな、外のは、どうも邪慳でいけないよ、いつもいつも、お前にばかり面倒かけてすまないネ、芳「どういたしまして、いつでもよろしふございます、お店



の方も皆片づけてしまいました、ハイ、

○動物と同じた

是れく、貴様等は何故さうなまける、ウン、商賣人と云ふものは、左様なまけてはならん、どうも貴様等は、生意氣でいかん、不精でいかん、小僧なんと云ふものは、動物と同じやうなものだ、だから少しでもやさしいコトバをかけると、直ぐにつけあがりて、なまける工夫ばかりするのだ、與太、何がおかしくて笑ふのだ、迂七、其ふくれ面は何んだと、片端から怒なり立て、小僧共を動物呼ばりして居るは、高利屋貸造と云ふ高利貸だ、

そこで小僧共も、動物的動作をすることゝさめた、作どん、君はいつも牛のやうに歩むネ、常どん、お前のあゆみつぶりは、まるで馬だよ、吉どんの荷を負つた姿は、駱駝のやうだな、そして旦那のふところをふくらしている所は、まるで虎狼の食に飽いたと云ふ形だ、ハ、ハ、ハ、と笑つて居た、

○買喰一

喜太どん、お前昨夕大福を買つて、寝ながら喰つて居たネ、喜それあウソだ、僕はそんなさもしい心はもたんよ、久吉だつて證據があるんサ、喜何つ、證據がある、何處

動物と同じだ 買喰



にサ、久ハ、、、、、、、お前の蒲團を見ねへ、大福  
がひとつおしつぶされて、ひらつたくへばりついてるで  
はないか、喜さうか、それあ閉口く、

○買喰 二

オイ、みんな起きて見ねへよ、此の與太公の状つてはな  
いじゃねへか、みなどれく、どうしたく、甲ハ、ア、  
奴人にかくして喰つてたと見へるネ、乙「まだ口の中に、  
芋がドツサリつまつてるよ、丙ハ、、、、、、、芋を  
握つて、口一杯芋をつめて、芋を枕にして寝ると云ふの  
は、餘程芋に執心と見へるネ、丁「ソツト取つて、みんな

匿してしまいいねへ、甲「目をさますと泣くよ、ハ、、、、、

○買喰 三

鈍太は何處へ往つたらふ、甲「便所だらふ、先刻コソく  
裏の方へ往つたから、乙「さうか、よしくと、忍び足に  
起ち去つて、間もなく又かへり來り、オイく、鈍太め  
おもしろいことしてるよ、丙「何をしてるよ、きかせてく  
れ、乙「便所のなかでネ、モリく、何か喰つてるよ、丁「ま  
さか、いくら鈍太でも、乙「往つて見ねへ、コソソリだよ、  
甲「イヤ、今日ばかりではないよ、いつでもやつてる、多  
分又か芋だらふ、丙「道理で屁ばかり放ると思つた、



○買喰 四

徳助と云ふ十ばかりなる小僧、時々ふところへ口を忍ばせて、何かボリ／＼喰つて居る、意地のわるい三太と云ふ小僧め、自分も時々やるくせに、徳公を困らしてやらふと思ひ、徳助の口をふところに入れて、物を口に入れてたころをはかり、突然に徳どん／＼とよびかけた、徳助あはて、ハイと返辭をしたが、サア口の中のは、呑み込むこともならず、吐き出すこともならず、唯口をモグ／＼させるばかりで、居すくみと云ふ姿である、番頭は見かねて、顔を洗つてお出でよ、臺所に追いやつた、

○買喰 五

十三四の小僧め、テンブラの立ち喰ひを、さかんにやつてるうしろから、大旦那がだしぬけにやつてきて、此の体をチラリと見、千吉、千吉とこゑかけた、千吉うしろを見てびつくり敗亡、口の中のテンブラをそのままにして、へいとまへにはせよつた、且返辭はどうであつた、且此の方からお届けいたしますとのこととでござります、且さうかと言つたばかり、ツ、と往つてしまつた、小言を言はれるよりも、此の方がつらい と言つて居た、



○商人の卵

室町の或る大店で、番頭さんが小僧を集め、さかんに注意をあたへて居た、お前達は商人のたまごじや、これから羽もはへ、翼も出来、四方八方を飛びまはる元をこしらへるのだ、決して人事と思ふてはならん、あついで所を我慢してあるくも、さむい所をこらへてはたらくも、皆自分のためだ、自分の他日の商業のために、稽古をするのじや、それを人事、主人のこと、思へばこそ、いやな心もふこるのだ、なまける氣もささすのだ、若し自分のためじやとあきらめられたならば、だれもなまけるものはな

いのである、商業はなかく六かしいものじや、忍耐して年期をつまねばならぬと、さかんに注意をあたへて居た、斯云ふ番頭さんこそ、本當の番頭さんと云ふのだ、

○豚の兒は豚

小僧番頭さん、豚の兒は豚と云ふのはどう云ふ心でしやう、番馬の子は馬ではないか、牛の子は牛ではないか、猫の子は猫ではないか、だから馬鹿もの、子は馬鹿ものと言はれ、利口もの、子は利口ものと言はるゝのだ、小「それでは馬鹿の子は利口になれますまいか、番イヤ、そんなことはない、獸類には教育と云ふことはない、だか

豚の兒は豚



ら豚の子はいつまでも豚じや、人類には教育と云ふものがあるから、勉強次第で、馬鹿の子も利口になり、氣ちがひの子も才子となる、少、それでは貧乏もの、子も金もちになれますネ、番、あゝなれるともサ、そこが商法の徳じや、

○小便所

源どん、お前は何故さう毎晩やるんです、モウ十一にもなるではありませんか、遅する氣でするのではございません、氣をつけて寝ますけれども、どうしてかツイもらしますのです、番、するときはどんな心もちです、少、よい

こゝろもちです、ハイ、小便が出さふでたまりませんから、あつちの垣根へ往つてやつて見ましても、思ふやうに出ません、こつちの便所へ往つても、思ふやうに出ないのです、そこでまごゝくしまして、やうゝ心もちよく、やつてしまつたと思ひますと、いつか床の中へやつて居るのでございます、ですからハット氣のつきました時は、いつもやつてしまつた跡なのでございます、番、ム、困つたナ、どうしても直らんカナ、少、あまり草臥て寝ますと、殊にやつてしまひます、誰か起してくれますと、きつとやりませんけども、起してくれるものはありませんから、番、よしゝ、それでは老婆の側に寝るサ、



○盆の十六日

勇どん、今夜はおもしろい競争をやらふではないか、勇  
 「どんな競争だい、武ウソ、斯云ふ趣向サ、新橋から京橋  
 までの間の、飲食物の露店を一品づゝ喰つて往くのサ、  
 尤も東側だけだぜ、勇して喰いかねた時は、どんな罰が  
 あるネ、武その日の會計を持つサ、勇よろしい、やらふ、  
 して人数は幾人ある子、武同意者五人あるよと、其の暮  
 合から、新橋に寄りあつまり、一つくと喰つて往つた  
 が、銀座三丁目あたりへくると、モウ這いるべき餘地が  
 ないやうになつた、されど喰いかねたとあつては、小僧

黨の名折となると云ふので、尙も喰ひく進んだが、一  
 丁目邊になつたときは、胸が割けるやうになつてきた、  
 併し何れも喰ひあふせることは喰ひあふせたが、其の晩  
 からの苦しみと云ふものは、真に九死一生のありさまじ  
 や、ある國手の治療で、全快はしたものの、一ヶ月ばか  
 りと云ふものは、實に不快なる日を送つた、其れからの  
 後の彼等は、生れかはつた人のやうになつたと云ふこと  
 じや、雨降つて地かたまるとは是れじや、

○菓子屋の小僧

梅吉「オイ、甘三さん、君は大層な甘黨であつたのに、な

盆の十六日 菓子屋の小僧



ぜ此の頃は少しもやらんのだ、其是れ菓子屋の小僧たる所以だ、梅、フム、さらいになつたのか、又喰いたくても喰はぬのか、其喰いたければドシ、喰ふサ、喰はれんから喰はぬのよ、梅、是れあふしぎだ、君にして喰はれんと云ふは、どうしてもふしぎと言はねばならぬ、其イヤ、さうではない、實は君、最初は喰つたよ、喰つたも喰つた、あくびをすれば、口から出るほど喰つたよ、何んでも一月ばかりは、喰ふほどに呑むほどにとやつた、するに大病にかゝつてネ、死ぬやうな目にあつたよ、それからと云ふものは、見るもいやだ、梅、フム、ふしぎなもんだネ、其イヤ、たれでもさうだとよ、だから人間は、何

んでもよいほどにしておけと言はれたよ、梅、ウム、分つた、それでは商賣もよいほどにしておかふよ、

○粗忽 一

主人「長松や、此の盆栽をな、二番目の柵へいつもの通りわけておけよ、踏臺の上にシカと乗つて、それから上るんだぞ、脊のびをしてわけてはならんよ、長、へイ、かしこまりましたと、早速持つてゆきは持つて往つたが、踏臺を持つてくるのをおつくふに思ひ、重い盆栽をさしあげて、柵の上に置ふとして、ツイに手を滑らし、下におとしてコツンと割た、サア大變と、いくらくっつけて見



てもくつつかぬ、主人「言はぬことか其れみる、くつつけて見て何んとすると、あたまを一つコッソ、

○粗忽 二一

主人「三吉や、いそいで吉田さんの所へ往つてな、お出かけに、是非おより下さいと云ふて来い、三「ハイと云つてかけて往つたが、しばらくすると戻つてきて、唯今もどりました、主人「お返辭は何とおつしやつた、三「今日は、いづれにも出かけませんておつしやりました、主人「フム、お前何んときいたんだ、三「ハイ、今日いづれにかお出かけになりませんかと伺ひました、主人「馬鹿め、さうさけば出

ませんと言ふだけじよ、

○粗忽 三

番頭「福どん、安田さん所へ往つてネ、昨夜お待ち申して居りましたに、お出で下さいませんでしたが、いつお出で下さいますか、お知らせ下さいましたと云つてこい、福「ハイと云ふてかけだしたが、暫時にして歸つてきて、どちらの方の安田さんでございませしやう、番「お前昨夕往つたでないか、本所の方よ、福「へい、わかりましたと言ひながら、かけだして往つて、や、小半時して歸つてきて、昨夜参上いたさふと云ふお約束は、決していたし

粗忽



たおぼえはございませんとおつしやりました、番だつて  
お前が歸つてきて、そう云ふたではないか、願ア、さ  
うでござりました、ハテナ、イヤ、昨夜参りましたが、  
八丁堀の方でございました、番ア、ア、云ふ馬鹿だ、そ  
れでは昨夜は八丁堀に往き、今日は本所へ往つたんだネ、  
ハ、ハ、ハ、ハ、と仕方なしに笑つて、

○粗忽 四

御新造「是れ忠吉や、遠山さんのところにネ、むし齒の妙薬  
がある」と云ふから、御苦勞だが、一つきいて来ておくれ  
な、盛ハイ、かしてまりましたと、かけてゆき、お、あ

りてかへつてきて、かきを黒焼きにして、そくい練り  
あはせ、之れをはるのだと言はれましたと云ふから、そ  
れつと言ふて、蠟を五錢だけ買ひ求めさせ、骨を折つて  
黒やきにし、之れをそくいではつて見たが少しも効が見  
えず、却つて痛みがはげしくなつてきた、そこで更らに  
孝三をやつて、きゝあはせたところが、蠟ではなく、柿  
の實であつた、若し柿の實がないときは、申柿、ころ柿  
でもよろしいとのこととでござりますとのこととであつた、  
かゝることは、輕忽に思ふてはならぬ、

○粗忽 五



御新造、是れ彦三や、旦那さまがネ、日本橋俱樂部にお出でになつてるからネ、此の手紙をソツトネ、お手渡しするのだよ、決しておととしてはなりませんぞと言ひわたされて、ハイと言ふてかけたしたが、明治座の前が素通りならず仲幕一つをソツト見てやらふと、そのまゝ飛び込んで一幕を見、それからエツサツサとかけだして、日本橋俱樂部に行き、旦那を呼び出して手紙を渡さふとすれば、コハンモ如何、ふところの中には影も形もない、それからあはて、帯をときてまで調べたがさらにない、そこですで／＼として内にかへつて見れば、何んのこつた、かの手紙は、其のまゝ、手文庫の上にしやんとおかれてあつ

た、世間にはこんな人は少くない、つゝしむべきことじや、

○銀の大黒さま

或る人途中にて銀の大黒を拾い、大いによろこび、家へかへると直さま、神棚にあげて神酒を備へた、すると前からあつた大黒さまが、大層に腹を立て、あとから来た大黒さまを、同じ神棚のうちへは置くまいと云ふに、銀の大黒もさかぬ氣を出し、銀の大黒なんだ、已に下りると云ふのか、フ、ン、已はたゞの大黒ではないぞ、はゝかりながら銀の大黒様だ、お前等にあげさげされるやうな、



僧小くばんわ

安つぽい大黒とは、大黒がちがふぞ、元の大黒、イヤ、銀でも古金でも、此の棚は已がもんだ、うぬなどを置いてたまるもんかと、槌をふりあげて銀の大黒のわたまをコツンとなぐつた、銀の大黒「モウ勘辨がならん、片端からなぐり休すぞと、片肌ぬげば是れはしたり、下はたいの銅であつた、

○半分は雪

静岡かち一人のお客が来た、そこで御馳走のかはりに、國をほめてよろこばしてやらふと、主人「あなたのお國ほど、結構な所は澤山ありませぬ、客「どういたしまして、主人先

立逆の廣お

づ竹細工杯の見事さと云つたら、迎も外の國では見るこ  
とが出来ません、客「イヤ、東都はみやこでござります、  
どうして龜井町で出来ます品にくらべられませしやう、主人  
「併し茄子などは、先づ外の國では見られませんな、特に  
早出でからに、美味でござります、客「イヤ、本所の  
砂村から出ます方が、いくら早い知れませんと、此の  
客なかく、自國を卑下して、よろこばし相な顔もせぬ、  
そこで此方の主人は、どうしてもよろこばしてやらふと  
思ひ、主人併しあなたのお國には、駿河の不二と云ふて、  
日本國中第一の高山がござります、客「イヤあれも、半分  
は雪でござりますと云ふた、



○柿のさね

或る田舎の人が、舊記を調べて居た側はらに、其のとも  
だちが見て居ると、舊記のなかに柿の核の黒焼は、まめ  
の妙薬なりと云ふことがあつた、すると其朋友が大いに  
よろこび、是れこそ大事の秘方なれ、よいことをこそ見  
覺へたれとて、急に人はしをかけ、柿のさねを五石ばか  
り買ひあつめ、これを黒焼にして、豆島へとふりまいて  
しまつた、(前のまめと云ふは、足のうらなどへ出るまめ  
を云ふ)

○古道具店

或る田舎町の古道具屋で、古道具ばかりでは、迎も引き  
あはぬとて、大福餅を作り、一個五厘づゝとして店にな  
らべておいた、すると一人のへうけた客がきて、客「オイ  
、是の餅はひとついくらだネ、主人「ハイ、ひとつ五厘  
づゝでござります、客「フム、どうだい一個三厘づゝにま  
けては、主「どうもおまけ申すことは出来ませぬ、一個五  
厘づゝにきめてありますから、客「イヤ、まけねば仕方が  
ない、新らしい餅の方を買ひますワと云ふた、



○慾ばり

八熊公、手前無暗と金ばかり欲しがるが、いのちを賣つても金がほしいか、熊奴しいどころではねへ、大金にありつくことなら、斯様のいのちのひとつやふたつ、殺されても惜しくねへ、ウム本望だよと云ふてることを、ある大金もちの旦那がさき込まれ、おもしろいことを云つてる奴もあるものだ、そんなら一万圓やるから、おれにいのちをくれ、思ふ存分にしておして殺してやるからと云へば、熊公しばらくかながへ、熊エへ、、、、時に旦那、物は相談でげすが、お前さんも一万圓と云ふ大金を出し

なさるもつまらねへし、私もあつた方が心もちがよいやうだから、どうでしやう、私をマア半殺にして、それで五千圓かくんなすつては、

○御新造さんが見てござる

ある物持ちの旦那が奥座敷に居て、手をたゝかれ、薬をあたくめて持ち来よと言はれた、茶の間にひかへて居た侍女がさゝちがい、茶を汲んで往つてさしだした、旦那は薬と心得、茶碗を取つておしいたゝかれた、侍女め感ちがいして、侍御新造さんが見ておいでなさいますぞへと云ふた、

慾ばり、御新造さんが見てござる、馬鹿もの



○馬鹿もの

僧小くばんわ

甲此の盆まへの拂いはどうした、乙イヤ、大概濟んだよ、だか多くの中には、うさんくさい掛取りもくるから、其の分は拂はずにやつたと、外見をはなした、すると側に居た馬鹿もの、馬ウム、随分うさんくさい掛け取りもくるであらふ、おらが家へは、不斷糞くさい肥取りがくると云ふた、

○掛もの

書畫や「旦那さま、伊席などへかけるに、以てこいと云ふ書

のかけものが、おはらいに出ました、どうでござります、おもとめになつては旦那フム、おもしろそうなはなしだな、して一体何んの畫だへ、唐畫かな、書畫や「イエ、ナニ、かぼちやの畫でござりますと云ふた、

○雷

イヤ、昨日のかみなりは、大したものでござりました、隣の湯屋の三助め、かみなりに臍をとられましたと見へ、即死してしまいましたと言へば、主人「ハテそれは、氣の毒千万なこととでござりました、私もあのかみなりでは、臍をつぶしましたけれども、いのちにはさはりませんで

立逆の臍お

掛もの、雷、女郎の尻



ござりました、

○女郎の尻

吉原は萬華樓の娼妓歌扇と云ふが、或る初會の客の床へ来て、歌「モシ、おやすみなさいましたかへと、おこして見ても、客は寝たふりをして、無言でゐる、そこでいらんも、夜着のなかへ這いり、寝やうとして横になるヒヨウシに、ブツツ大きな尻が出た、客はかかしくてたまらぬが、シツトこらへて息をつめ、少しの身うごきもせぬ、おいらんは恥かしくてならぬ、若し本當にねてゐてくれ、ばよいが、万一空ねいりして居てはわと、目を

ほそめにあけて、そろりと首をもたげて見る、客の方でも女奴め、どんな顔をしてゐるか、そろりと目をあいて、女の顔を見やうとすれど、薄すぐらくてシカト見へぬ、(此のところ隻方だんまり)女もだんくと首をもたげ、客のかほを見やうとして、思はず兩方目と目を見あはせ、女郎「オヤと云へば、客は無言でそばのあんどんをフツト吹きかけせば、ひけのヒヨウシギガ、チヨンくと鳴りひいた、

○馬夫の碁

おはくの馬夫共、紋日じやて、寄りあつまり、甲「オイ、

女郎の尻 馬夫の碁



今日は何をしておそばふ、乙「さうサ、何がよからふ、丙  
 「どうじや碁をうつては、頃日は何處でも碁がはやつて、  
 旦那衆は寄りさへすれば碁じや、丁「おめへ碁を知つて  
 か、丙「知つてるともよ、毎日旦那衆のうつのをみてゐる  
 よ、甲乙「それやおもしろい、さいはい今日は旦那衆が留主  
 だ、一つ碁盤をもつてきて、やつて見やうじやないか、  
 丙「よしと云つて碁盤を持ち出してきた、丁「一体どうする  
 のだ、丙「どうするの、こうするのと云ふわけはないよ、  
 なんでも白い石と、黒い石を互いにもちて、コツリ／＼  
 とならべればよいのじや、庚「フム、それではおれがやる、  
 おれは白じやぞ、壬「さうか、それなら己が黒じやと、互

いに左右にわかかれ、それうつぞ、それ又うつぞと、盤の  
 上にだん／＼とおきならべ、モウならべる所がなくなつ  
 た、丁「これ／＼、丙「助よ、モウならべるところがない、  
 これでしまいと見ゆるナ、だが一体どちらが勝つてゐるの  
 だ、丙「まて／＼、ちよつとまつてくれと、直に裏に飛び  
 出し、わらすべを二筋持つてきて、丙「サア／＼、長いの  
 を取つたが勝じやと言ふた、

○馬きらい

或る侯爵家の家扶某と云ふ男、たび／＼遠乗のお供を言  
 ひつかるけれど、いつも虚病をかまへて、お供の列に加



僧小くばんわ

はつたことはない、ところが又も命ぜられた、いやでござりますとも言へず、馬は大きらいでござりますとは尙さら言へず、いなむにコトバなく、泣くく馬に乗りてお供の列に加はつた、ところが行くこと二三丁にして、その馬何におどろいたか、めつたやたらに駈け出した、家扶先生死身になつて、鞍壺へシカとかちりつき、馬のわしにまかせて飛んで行くむかふへ、知己の男飛びだし、馬の上へこゑをかけ、知己何處まで行かるゝのじやときいたら、家扶此の分では、何處へ行くやら、さつぱりと分りませぬと答へた、

○居候

居候膳にむかひて、一杯喰ひしまいてかへければ、内儀お湯かへとさく、居候おゆでもおめしでも、

○寒國

立逆の膳お

貴公の御在所は、寒國と云ふことでござるが、さぞかし寒いことでござらふノウ、密イヤ、ハヤ、言語同断でござります、寒中になりますと、箸を膳へおいたばかりで、モウ膳へ氷りつきます、飯粒などは、膝から落ちます間に、モウ麴のやうになつてしまひます、主人へイ、はなし

居候 寒國 七兩二歩より安い



僧小くげんね

にきいたよりも、大變でござりますな、密もつとおもしろきことがござります、人とちよつとはなしをいたしましても、みんな壁にこほりついてしまします、ですから寒中にいたしたおはなしは、残らず壁に凍りついております、其それでは、春になりましたして解けだすと、さぞくやくましいこととでござらふテ、ハツハ、、、、

○七兩二歩より安い

姦夫亭主に見つけられて、二階にかけあがる、亭主おちつきはらい、これくとよびてまおとこをふるし、酒を買へと云ふ、まおとこ、是れは存じの外の首尾、私に奇

麗にくれる了簡にて、なごりのさかづきごとをするために、酒を買はするのであらふと、よろこびいさんで一升買ふてきた、すると亭主は、一升の酒をひとりでひつかけてしまい、是れ色男、今度又見つけると、蕎麥と酒を買はするぞと云ふた、

○親子生酔

親父酒に酔ふて外から歸り來たり、これや善太、おのれがわたまは三つに見へるぞ、其様かたわものに、此の家をゆづることはならぬぞ、息子アツハ、、、、こんなにぐるくまはる家をもらふて、なんにするものぞ、

立逆の隣お

親子生酔 望遠鏡



くれると云ふても入らぬはと云ふた、此の息子も、非常な呑んだくれであるのじや、

○望遠鏡

或る華族の殿様、お二階から遠めがねにてあちらこちらを見ておらるゝ、して三太夫を召され、あれなる五重の塔は、いづくじや、三太夫「ハ、ツ、淺草の観音のでござります、殿「こちらに見ゆる鳥居は、三みめぐりのいなりでござります、殿船のゆきゝして居るところは、三竹屋のわたしでござります、殿「なか〜よいけしきじやのと、一心にわたし場を見ておらるゝと、うつくしい十七八の

むすめと、二十あまりの業平とも言ひ相な若ものと、堤上でびたりと行きあひ、顔と顔をよりあはせ、何やらひそ〜ばなしをする体である、すると殿さままたましかね、遠めがねに耳をおしつけ、三太夫、しづかに〜と仰せられた、

○糠やの若もの

丑の時まいりして、神木に灸をすへて居る男がある、宮守之れを見つつけ、なぜ釘をうたぬぞときいた、男「イヤ、わたくしののろいます男は、糠やでござりますからとこたへた、



○後悔

僧小くばんわ

あるうつけもの、酒を一升買ひに行く、酒屋の伴頭呑口へ升をあて、ひねつたけれども出がわるい、そこで上方へ息だしをもむと、のみぐちより瀧のやうに出てきたかの酒買いにきた男、なみだをながして泣く、伴頭おまへはなぜお泣きなされます、男さいて下され私の親は、今は三年のむかしでござりますが、小便がつまつて、それで相はてましてござります、若しわたまへ息口をもみましたら、たすかつたらうにとおもいましたと、またさめと泣きだした、

立逆の齋

逆お齋立

わんぱく小僧終



大正六年四月八日印刷  
大正六年四月十五日發行

定價金參拾錢

送料金四錢

著者 樂天子

發行者 東京市神田區美土代町二丁目一番地 石塚卯之助

發行者 東京市神田區表神保町三番地 齋藤熊三郎

印刷者 東京市神田區塗師町七番地 岡田吉三郎

不許複製

わんぼく小僧

發行所

東京市神田區美土代町二丁目一番地 石塚松雲堂

東京市神田區表神保町三番地 崇文堂書店

東京市神田區美土代町三丁目一番地 富田文陽堂

振替東京三三〇七番



□ 書 適 好 の 般 一 民 國 □

▼ 本 書 を 手 に し 士 氣 を 鼓 舞 し 品 性 を 養 ひ 給 へ ▲

# 帝 國 軍 歌 集

▼ 兒 童 は 勿 論 學 生 軍 人 店 員 諸 君 も 是 非 ▲

■ 錢 五 拾 價 定 ■

錢 二 料 送



278
947



終

行刊房書二